

プロトタイプ論による日本語の移動構文の他動性に関する解釈：中国語訳との比較アプローチ

謝, 新平
上海海洋大学 | 九州大学芸術工学研究院：訪問教授

<https://hdl.handle.net/2324/1485145>

出版情報：Studies in comparative culture. (92), pp.91-102, 2010-06-30. 日本比較文化学会
バージョン：
権利関係：



プロトタイプ論による日本語の移動構文の他動性に関する解釈
—— 中国語訳との比較アプローチ ——

謝 新 平

(上海海洋大学)

Interpretation of transitivity of Japanese Movable Constructions
Based on Prototype Theory

—— Comparison Approach with Chinese Translations ——

XIE XinPing

Shanghai Ocean University

Abstract

We discuss the transitivity degree of movement verb constructions which transitivity/intransitivity is unclear. Based on our view that analyzing the degree is much effective to explain the transitivity of movement verb constructions rather than categorizing them into either a transitive class or an intransitive class, we compare Japanese movement verb constructions with their Chinese translations, categorize them into three categories based on the degree of semantic transitivity, and discuss the degree using a prototype theory in cognitive linguistics.

- I Category: The subject is an agent having a will. The movement of the agent puts the target area under its control quantitatively or associates results of changing mastery over the area. Semantic transitivity in this category is high.
- II Category: The subject is not always an agent having a will, but any subject in this category is movable and has some kinds of energy. It has agentivity though it is weaker than that of a subject in the I Category. Agent's movement puts its target area under its control. It does not seem to change the target but influence it. The transitivity in this category is weaker than that in the I Category.
- III Category: The subject is not an agent having a will. Sentences in this category have an implication of directivity, which is the common point with the I and II Categories. This category does not have transitivity.

We conclude (1) movement verb constructions have several different levels of transitivity from high to zero and show hierarchy of the transitivity and (2) proposed three categories have common implication on directivity and are connected continuously.

1 はじめに

日本語の他動性を中心的に文法現象を考える場合、他動詞と自動詞、他動詞構文と自動詞構文の形態的意味的対立は明白であり、これらの境界も明確である、と一般的には理解されている。しかし、白他の動詞の対立や他動詞構文と自動詞構文の対立がなくなったり、自動詞が他動性の標識「ヲ」格を取ったり、繋がって境界が曖昧になった場合が、移動構文のように実際の用法で見られる。

移動構文のこれらの現象は古くて新しい課題であり多くの研究が行われてきた。松下（1923、1924）は移動動詞構文を、「天を飛ぶ」のような通過場所を示す「ヲ」格を取る進行的形式他動と「国を去る」のような出発点を示す「ヲ」格を取る出発的形式他動とに分類し、移動動詞構文は形式的他動であるとした。柴谷（1978）は、移動動詞構文は、通過場所を全面的にカバーして移動するという意味の他動性と、移動場所が受動文主語になり得る場合、および、二重対格目的語制約を受ける場合の2つの統語的特徴があるとし、意味的にも統語的にも移動動詞構文は他動詞構文であるとしている。しかしこれらの研究での例示数は少なく、具体的な言語表現を必ずしも提示したものとは言い難い。また、主語が無情的で、場所が抽象的な場合の解釈可能性を保証できないことも難点である（謝（2004））。

その後日本語教育が盛んになり、通常他動詞と共起する「ヲ」格と区別するため、移動動詞と共起する通過点・出発点を移動補語とする新しい概念を設けるようになった。例えば、杉本は通過点の「影響の全体性」（1986）、および、「移動の方向性の明確さ」（1995）を主張して、移動動詞と共起するこれら通過点・出発点を移動補語とした。しかし、この補語説は意味的解釈の点で、基本的に上述の目的語説と変わらず、同じ問題を抱えていると言える（謝（2004））。

また、鈴木（1985）やヤコブセン（1989）は、移動構文の主体（位置・向き・一部分）が変化し、欧州言語のように再帰的作用が働いて意味的には再帰文と繋がっているとする再帰移動説を主張している。しかし、移動構文までも再帰構文とするには再帰の意味を拡大しすぎていて無理が感じられる。欧州諸語に見られる再帰には元々、他動詞が目的語として再帰代名詞を伴うこと、主語と目的語が同一者であること、などの制約があり、この概念を無条件に日本語に持ち込むこと自体に疑問がある^(註1)。また、基準になっているいわゆる再帰文自体に見られる〈再帰性〉は一概ではなく、こうした違いが〈再帰性〉という概念の設定にとって無視できるものであろうか、と疑問も残されている（謝（2004））。また再帰文と違って移動構文の問題は、動詞の形態が自動詞である点にある。天野（1988）と同じく本研究でも、厳密に定義されていない〈再帰性〉という概念を日本語に特立する必要はない、という考えを採っている。

移動構文において、本来移動の意味を持つ自動詞と分類されるべき動詞が他動詞と共起する格標識「を」を伴う問題の解釈は、詞レベルで議論している限り容易ではない。また、先行研究に共通する問題は、移動構文数が多いにも関わらず言語資料が不十分なまま一括して議論されている点と、他言語との比較（という多角的な視点はよいのだ）が西欧言語に偏っている点にある。

本研究では、この自動詞構文か他動詞構文かという不明瞭な現象を、認知言語学のプロトタイプ

論の観点から中国語訳と対照し、文レベルで議論する。移動構文を一概に論じることは難しいと考え、目的語説のように通過場所に全面的に影響する他動性の高い移動構文もあれば、他動性が低く自動詞構文に近い構文もあるし、更にはその中間的なものもあると考える。本論文での移動動詞構文の他動性強度の概念を図1に表す。謝（2004）でもこの新しい視点である対照比較の観点から移動構文を考察し、その分類を試み、他動性の強弱度が存在することを指摘したが、具体的な度合まで議論できていなかった。本論文では主に、移動構文の意味的他動性の強弱度を具体的に議論する。

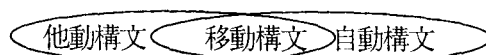


図1：移動構文と自他との関係図

移動動詞構文のように自他が不明瞭の場合は、自動か他動かという見解より、むしろ形式と意味の両面から構文の特徴とその自他の度合いを解釈するほうがより効果的と考えられる。次節では他動性の程度という視点から自他を説明することができるプロトタイプ論を導入して移動動詞構文を考察する。

2 他動性のプロトタイプの解釈について

他動性と日本語の他動性を原型論に基づいて議論する先行研究は多い。代表的な研究に角田（1991）、ウエスリー・M・ヤコブセン（1989）、Hopper and Thompson（1980）、山梨（1997）、吉村（2008）などがある。謝（2009）^(註2) はこれらの先行研究を概観した上で、日本語の他動性の4つのプロトタイプの意味的特徴と2つのプロトタイプの形式的特徴を提案した。

（プロトタイプの意味的特徴）

1. 何かを行う行為者がいる。
2. 変化を被る対象がある。
3. その対象が被る変化は、行為者によって引き起こされたもの。
4. 行為者がその行為を意図的にを行い、コントロールでき、一番責任がある。

（プロトタイプの形式的特徴）

5. 「ヲ」格の使用
6. 他動詞の使用

また、他動性の度合いの観点から他動詞のプロトタイプの意味的特徴は更にプロトタイプの特徴と周辺的特徴に分けられるとの吉村（2008）の立場に立ち、次の4つの周辺の意味的な特徴も加え、これらの特徴を満たせば日本語の他動性のプロトタイプになる、とした（謝（2009））。

（周辺の意味的特徴）

7. 完結のアスペクト：目標の達成
8. 現実ムード：現実を表す節である
9. 対象の個別性：特定の指示的なもの
10. 瞬時性：点的で突然の行為を述べる

以上のように、日本語の他動性のプロトタイプは合わせて10個の特徴で定義される。

次節では、プロトタイプの形式特徴から見れば非典型である移動構文の意味的他動性の度合を、プロトタイプの意味的特徴に基づいて検討していく。本研究での解析には、芥川龍之介の小説40編と小林多喜二の短編小説10編から抽出した303例を用いた。

2.1 プロトタイプ論による移動構文の分類

まずは他動性のプロトタイプの意味的特徴に基づき移動構文の3分類を試みる。また中国語訳と対照するために中国語訳を付与する。この分類には、次の3点、主に動作主の動作主性の有無、動作の対象の受影響性などから検討する。

1. 主語の動作主性。つまり、主語の位置にある主体が意志のある行為者であるかどうか。
2. 動作の対象への影響と変化。つまり、動作によって動作対象が受けた影響と変化である。
3. 動作主の運動の方向性と支配性。動作主の運動動作が方向性を持つかどうか、あるいは、動作主が運動を自主的に支配できるかどうか。

例文では、目的名詞句部分を一重下線で、動詞句部分を二重下線で、そして特徴を波線で表示する。

Ⅰ 類 結果、変化、難易、接触類

この類の移動自動詞構文は、意味的には動作主が意志のある有情者であり、対象物の「場所」に働きかけて、何らかの変化・結果を被らせる。動作主は努力によって場所を量的に完全又は部分的に征服して、影響下に置く。逆に、場所の方は完全ないし部分的に何らかの影響を受けることになる。意味的には、この類の移動構文は典型的な他動詞構文と類似し、他動性が比較的高い構文と考えられる。

具体的には下記a～c類のような特徴を持つ。つまり、動作主の意志性のある行動によって量的に対象の場所を減少させ、消化していく（a類）、行動によりある結果を出し、何らかの結果を表す表現を伴う（b類）、場所に接触し、征服可能の意味合いを出す（c類）、である。この細分化されたa～c類は明確に区別できない場合や重複する特徴がある場合もあるが、共通の特徴として何らかの結果を達成できる意味合いがある。

a 対象の変化「量的減少」などのある類

この類は対象の変化が量的に減少し、動作主の意志性のある行動によって「消化」されていく類である。例文1～3の“~~~~”下線のように、具体的な量的変化を表している表現が明らかに文中に現れている。或いは例文1、例文3のように、量的に達成した結果の意味を含めている複合動詞「登り切る」「上りつめた」が文中に現れている場合もある。中国語の場合は、例文3のように、動詞は動作を表す「爬」と結果を表す「上」の結果も合わせて含意する複合動詞（「爬+上」、「登+上」、「走回+（家）去」）となる。（二重下線は動詞述語 一重下線は目的語）

- 中国語訳 (好不容易爬上很陡的楼梯最上边一级。)
- 中国語分解 爬上：結果複合動詞、楼梯：場所名詞、最上边一级：数量詞
- 日本語逐語 上りつめた、梯子を 一番上の段
- 日本語 梯子を最上の段まで上りつめた

- 1 その路をやつと登り切つたら、今度は高い崖の向うに、広々と薄ら寒い海が開けた。

(トロッコ 芥川龍之介)

訳：沿着这条路、斗车好不容易才登上坡顶。这时只见蓝霞辽海展开在悬崖峭壁的那一边、洋面上寒意轻笼。

- 2 下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括っていた。それが、梯子を二三段上って見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと動かしているらしい。(羅生門 芥川龍之介)

訳：仆最初以为城楼上没有什么了不起、都是些死人罢了、当他踏上两三级楼梯一看、在城楼上不知是什么人点起了火、那火光在各处闪动着。

- 3 下人は、守宮のように足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。(羅生門 芥川龍之介)

訳：仆人象蜥蜴似地蹑着脚、好不容易爬上很陡的楼梯最上边一级。

b 対象の音、上・下・過・出などの動作結果がある類

例文4～8のように、動作主の移動動作によって接触対象の「場所」に変化の結果としての「音」が明らかに現れている。例文4～8のように、動詞述語に助動詞または助動詞の役割を果たす動詞「上・下・過・出」を伴って、動詞述語に結果の意味を持たせる。この点はa類の結果変化と重なっており、I類には明確に分けられない部分もあることを示している。「動詞+目的語」の他動詞構文形式で表している例は、今回分析した303例文中116例もあり、多数を占める。

- 中国語訳 走上 (黑暗的) 楼梯
- 中国語分解 走上：動詞術後、楼梯：目的語
- 日本語逐語 上って来る 梯子
- 日本語 (暗い) 梯子を上って来る

- 4 その時また彼の耳には、誰かの梯子を上って来る音がみしりみしり聞え出した。

(お律と子等と 芥川龍之介)

訳：这时、他又听见了有人登上楼梯的声响。

- 5 慎太郎はふと耳を澄せた。誰かが音のしないように、暗い梯子を上って来る。

(お律と子等と 芥川龍之介)

訳：慎太郎忽地尖起耳朵去听、有人放轻脚步走上黑暗的楼梯。

- 6 令嬢明子は、頭の禿げた父親と一しよに、今夜の舞踏会が催さるべき鹿鳴館の階段を上
つて行つた。（舞踏会 芥川龍之介）

訳：小姐明子和她的秃头父亲一起，走上这天晚上举办舞会的鹿鸣馆的阶梯。

- 7 又階段を急ぎ足に下りて来た。（舞踏会 芥川龍之介）

訳：匆忙走下楼梯。

- 8 それから何故か思ひついたやうに、白い襟飾へ手をやつて見て、又菊の中を忙しく玄関
の方へ下りて行つた。（舞踏会 芥川龍之介）

訳：同时好像想起了什么似地把手伸向白色的领带、接着穿过菊花丛急匆匆向大门那儿走去。

c 接触、征服していく類

例文9、10の日本語は「踏む」「登る」という場所への接触を表す動詞が表しているように、移動動作は場所への接触を表す。中国語訳は他動詞構文ではなく場所の前に前置詞「在」などを使用する。例文11は不可能、或いは困難なことを可能にするという目標を達成する意味合いがあり、転じて何か征服する意にもなっている。この場合の中国語訳は他動詞文になる。

●中国語訳 「渡難越之海洋。

●中国語分解 渡：動詞述語、（難越之）海洋：目的語

●日本語逐語 渡る、「超え難い海の波」

●日本語 越え難い海の浪を渡り

- 9 彼は雨に濡れたまま、アスファルトの上を踏んで行つた。

（或阿呆の一生 芥川龍之介）

訳：他淋着雨、在柏油路上行走。

- 10 彼は汗を拭ひながら、爪先き上りの道を登つて行つた。（或阿呆の一生 芥川龍之介）

訳：他揩着汗、踏着上坡路走去。

- 11 わたしは現に時とすると、攀じ難い峯の頂を窮め、越え難い海の浪を渡り——云わば不可能を可能にする夢を見ることがございます。（侏儒の言葉 芥川龍之介）

訳：我现在每每在梦中达难攀之峰顶、渡難越之海洋——也就是在作着使不可能的事成为可能的梦。

以上のように所謂移動自動詞構文の中では、他動性が比較的高いと考えられる構文が多いことがわかる。この類の中国語訳を見ると、基本的に「動詞述語＋目的語」の構造の方が多い。

Ⅱ類 通過経路・点、出発点の類

通過経路・点と出発点に重点を置き、運動の過程と移動を重視している点に特徴がある類である。移動補語という新概念が使われ始めたこともこの類の特徴に起因していると考えられる。この類は、「動詞＋場所」の他動詞構文形式ではなく、場所格の前に「在、打、从、順着、沿着」などの前置詞を使って訳し、「前置詞＋場所＋動詞」の中国語形式になっていることが基本である。例えば例文12は以下のようにになっている。

●中国語訳 打桥下经过

●中国語分解 打：前置詞、桥下：場所、经过：動詞述語

●日本語逐語 打つ（を）、橋の下、通る

●日本語 橋の下を通る

12 そのまわりに紅お囃子《はやし》をのせたり楽隊をのせたりした船が、橋の下を通ると、橋の上では「わあっ」と云う哂《わら》い声が起る。（ひょっとこ 芥川龍之介）

訳：每逢载着伴奏乐或乐队的船打桥下经过、桥上就哄然大笑起来、还绕上一两声“混蛋”。

13 良平は少時無我夢中に線路の側を走り続けた。（トロッコ 芥川龍之介）

訳：良平不顾一切地沿着轨道的一侧不停的奔跑着。

14 自分の疲れた、眠い体を姉に半ばもたれさせて、線路道を帰った。

（同土田口の感傷 小林多喜二）

訳：我把疲劳困倦的身体靠着姐姐沿铁路回去。

以上のように「在、打」介詞に訳す場合は、移動の過程性、継続性という意味合いがある。この類は303例文中91例がある。「順着、沿着」介詞に訳す場合は場所を一方的に全面的に接触し、占めて移動する意味合いがあり、この点から見れば、先行研究の目的語説の「全面的カバー性・方向性の明瞭性」と類似している。この類の例は25例がある。

Ⅲ類 主語が無情物である類

この類は主語無情物である原因か、完全に他動性が無い静的な構文も現れた。中国語に訳す場合は、例文15のように、形容詞構文になる場合もある。

●中国語訳 鼻尖有点儿翘

●中国語分解 鼻尖：名詞、有点儿：程度副詞、翘：形容詞

●日本語逐語 鼻の先、すこし、上を向く

●日本語 鼻の先が少し上を向いていて

- 15 何しろ色が白くって、眼が涼しいから、鼻の先が少し上を向いていても、とにかく一通りの美人である。（葱 芥川龍之介）

訳：由于皮肤白皙、有一双明亮的眼睛、所以尽管鼻尖有点儿翘、总算得上是个美人。

- 16 不思議な事に、さうするや否や、先生の思量は、ストリントベルクを離れてしまふ（手巾 芥川龍之介）

訳：说也奇怪、一看到灯笼、先生的思想便离开了斯特林堡。

- 17 不安はそれを中心にして、容易に念頭を離れない。（戯作三昧 芥川龍之介）

訳：他总也排遣不开环绕着水浒传而产生的不安。

この類の構文は303例文中52例ある。基本的には他動性が高い構文は見当たらない。しかし、例文17のように逆に「不安」という主語の位置にあるものを中国語に訳すと「目的語」の地位に降格されてしまう場合もある。

以上のように、中国語訳との対照から所謂移動構文を大きく3つに分類した。Ⅰ類のように他動性が高いものもあれば、Ⅲ類の中の例文15のように他動性がまったくないものも含まれている。今までのように、移動構文を一律に議論することには限度が感じられる。

また、他動性の強弱度合いを考える場合は、図2のようにⅠ類からⅢ類に進むにつれ他動性が弱くなっていくと言える。

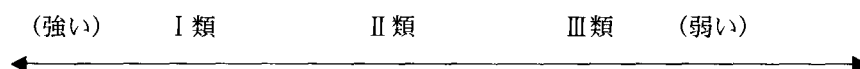


図2 他動性の度合い

3 プロトタイプ論による他動性の考察

移動構文は形式的には典型的な他動詞構文から離れているが、以上のように移動動詞構文の種類が多様で、他動性の高いⅠ類から他動性が全くない静的なものまである。意味論の立場からこれらを総括して解釈することは難しいと考える。本節はより具体的に移動構文の他動性について検討してみる。

前節では意味的他動性という観点から具体的には三つの側面、1：主語の動作主性、2：動作の対象の影響と変化、3：動作主の運動の方向性と支配性、について検討する。

本節では各類の意味的他動性の特徴をより具体的に分析し、他動性の強弱度、階層性を以下のように纏める。

I 類の他動性の意味的特徴

この類の移動自動詞構文の特徴の1つは、動作主が意志性のある有情者である点である。動作の対象＝場所への「影響性」は、移動動作によって「場所」を量的に支配して影響下に置く場合もあれば、移動動作という行為によって「変化の結果」の結果が伴う場合もある。また、場所に接触し、支配下に置き、征服していく意味合いを持つ場合もある。

文法的には量的支配の場合は、例文1～3のように、「梯子を二三段」「急な梯子を、一番上の段まで」と数量を表す詞を伴って、支配、達成度を明確に表す場合がある。主語動作主の意思性としては意思を表す副詞「やっと」等が文中に表れている場合もある（例文2を再掲）。

移動動作がその動作の対象「場所」への支配、接触によって場所に「変化の結果」をもたらした場合は、「音」等の結果が文中に現れて動作がもたらした結果をより明確に表す（例文4を再掲）。

- 2 下人は、守宮のように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。（羅生門 芥川龍之介）

訳：仆人象蜥蜴似地蹑着脚、好不容易爬上很陡的楼梯最上边一级。

- 4 彼の考がそこまで来た時、誰かの梯子を上って来る音が、みしりみしり耳へはいり出した。（お律と子等と 芥川龍之介）

訳：洋一刚一想到这里、只听见有人咯吱咯吱上楼梯的声音。

II 類の他動性の意味的特徴

この類の特徴は、主語の位置にある主体が有情者ではない場合もある点である。前掲の例文12のように「船」であったり、例文18のように「血」であったりする。しかし、共通しているのは無情者だが動態的である点である。例えば、「船」のほうが人間よりも行動範囲が広くエネルギーを持っているので、動作主性が高い有情者の人間に通じる点がある。しかし、動作主性は明らかに低い。また移動行為によって場所を支配下に置くカパー性と方向性がある点はI類と共通するが、主語の対象に対する影響性が明らかにI類と異なるであろう。

- 18 その血は顎から喉を伝って、すっかりムキ出しにされて、せわしく喘いでいる胸を流れるのが分かった。（人を殺す犬 小林多喜二）

訳：鲜血顺着下巴流过喉咙、滩到裸体的、急促地喘着气的胸口上。

III 類の他動性の意味的特徴

この類の特徴は、主語の位置におけるものが無情者で、動作主性がない点である。当然対象を支配する意志性も表れない。例文15のように意味的には「鼻」の様態を形容し、形容詞文に似ている。ただ構文全体が方向性という意味合いを持っている点ではI、II類に共通している点もあると言えるであろう。

15 何しろ色が白くって、眼が涼しいから、鼻の先が少し上を向いていても、とにかく一通りの美人である。（葱 芥川龍之介）

訳：由于皮肤白皙、有一双明亮的眼睛、所以尽管鼻尖有点儿翘、总算得上是个美人。

以上のように本章で分類・考察した3類の自動詞移動構文の意味的他動性の強弱と特徴を、表1に纏めた。まず、主語の動作主としての性質についてみると、Ⅰ類からⅢ類まで動作主性の有無、つまり動作主らしさが変わっていくことが分かる。Ⅰ類とⅡ類の主語は人間（動作を行う動作主）で、即ち動作主性がある。Ⅲ類の主語の位置におけるものは動作の動作主ではなく動作主性がない。又、動作主の動作対象に対するコントロール性の強弱についてみると、Ⅰ類の動作性と支配性はⅡ類より強いので2つの「+」で示すことにする。移動動作による場所対象の受ける影響もⅠ類のように結果・変化を伴うものとⅡ類のように結果と変化を伴わないものがあり、前者を2つの「+」で示し、影響だけ伴い結果を伴わないⅡ類は1つの「+」で示すことにする。最後に、3つの類に共通している意味特徴は「方向性」であり、移動構文の共通の意味であることが分かる。

表1 3類の移動構文の他動性の強弱特徴表

	主語の動作主性	主語の支配性	対象の変化と受影響性	動作・運動の方向性
Ⅰ類	++	++	++	+
Ⅱ類	+	+	+	+
Ⅲ類	—	—	—	+

表のように主語の動作主性はⅠ類からⅢ類にかけて段々弱まり、主語の「場所」対象に対する支配性と、対象「場所」の受ける変化と影響を受ける程度も同様に段々弱まっていく。これら3類に共通している点は「方向性」である。

4 結び

本研究では、多くの実文例を通し中国語訳と対照しながら、所謂移動動詞構文の他動性をプロトタイプ論的観点から議論した。意味的他動性の強弱度と中国語訳との比較を通じた考察から、以下の2点の結論を得た。

(1) 意味的他動性の強弱度から、移動自動詞構文を大きく3分類できる。

Ⅰ類は主語が意志のある有情者で、動作主性が一番強い。動作主の移動行為により、動作の対象の「場所」が影響と変化を受け、量的に達成され、影響下に置かれたり、何らかの「変化の結果」がもたらされたりする。Ⅰ類の意味的他動性は典型的な他動詞文の他動性に相当し、他動性が高いと言える。

Ⅱ類は、主語が有情者ではない場合もあるが、この類のすべての主語に共通しているのは、移動可能で何らかのエネルギーを持っている点である。動作主性はⅠ類ほどではないが、有情

者の人間に通じる点があり、動作主性がある程度あると言える。

動作者の移動行為によって行為の対象「場所」を自主的に影響下に置く。カバー性と方向性がある点はⅠ類と共通するが、対象に対する影響が明らかに異なる。動作対象に変化を与えないが、影響は与えると考えられる。つまり、意味的他動性があるがⅠ類より弱まるのである。

Ⅲ類は、主語が無情者で動作主性がない。当然対象を支配する意志性も表れない。意味的には形容詞文に似ている構文もある。「方向性」という意味合いがある点で、Ⅰ、Ⅱ類に共通している。この類は他動性がない自動詞文に相当すると言える。

- (2) 形式的自動詞移動構文は、意味的他動性の観点では他動性の高い構文から他動性がない自動的構文までの階層性を持つ。また、これら３類の間には連続性がある。

先ず、他動性の必要条件である行為者には、動作主性の側面で意志がある有情者、意志性がないがエネルギーがある動作者、無情者という階層性がある。また、主語の対象「場所」に対する支配性と対象「場所」の受ける変化と受影響性も、Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類と段々に弱まっていき、この関係が三者の間の他動性の強弱関係を示している。同時にこれら３つの類には「方向性」という共通の意味合いがあり、この点で連続性を示していると言える。

今後は、文例の解析などを通じて、連続性があるこれら提案３分類の根拠を補強していきたい。

註

- ¹ 天野(1988)では従来〈再帰性〉という概念を用いた説明が有効であると主張されてきた事象について検討し、わざわざこの概念を特立する必要性がないことを述べた。詳しい内容は天野(1988)を参照されたい。
再帰の定義 再び帰ってくること。
再帰動詞 ある動作の作用が、主語自身に再び帰ってくるような役目を持つ動詞。
再帰代名詞 (主語自身を示す代名詞)を目的とする他動詞であるが、全体として自動詞が表すのと同様な意味を表す。英・独・仏・露などのヨーロッパ系などの外国語に多い。
I hide myself (私は隠れる)
近代英語では代名詞を省く習慣の生じたものも多く、それらは自動詞に転成した。日本語では「花が開く」の「開く」の類で、再帰動詞と呼ぶ説もある)
- ² 本研究は筆者が2009年度九州大学大学院比較社会文化学府に提出した博士論文の一部分を訂正、加筆したものである。本研究では謝(2009)としている。

引用参考文献

- 天野みどり(1988)「日本語文における〈再帰性〉について」『日本語と日本文学』9号
ウェスリー・M・ヤコブセン(1989)「他動性とプロトタイプ論」『動詞の自他』須賀一好・早津恵美子編
ひつじ書房
影山太郎(2001)「第2章 移動と経路の表現」『日英対照一動詞の意味と構文』大修館書店
角田太作(1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版
坂原 茂(2002)「プロトタイプ、スキーマ、意味的制約」『シリーズ言語科学2 認知言語学Ⅰ：事象構造』西村義樹編著 東京大学出版会

- 坂原 茂 (2004) 「認知的アプローチ」『意味 言語の科学4』郡司隆男等著 岩波書店
- 謝 新平 (2003 a) 「状況「ヲ」格の他動性について—中国語訳との対照から—」国語学会予稿集 2003 年度春季大会
- 謝 新平 (2004) 「いわゆる移動構文の他動性と分類について—中国語訳との対照を中心に—」『地域文化研究』第2号
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店
- 柴谷方良 (1985) 「主語プロトタイプ論」『日本語学』11月号
- 杉本 武 (1986) 「格助詞」『いわゆる日本語助詞の研究』奥津敬一郎・沼田善子・杉本武 凡人社
- 杉本 武 (1995) 「移動の「を」について」『日本語研究』第15号 東京都立大学国語学研究室
- 鈴木英文 (1985) 「ヲ+自動詞」の消長につて」『国語国文学』62巻5-8号
- Hopper and Thompson (1980) 'Transitivity in Grammar and Discourse. Language 56
- 松下大三郎 (1923-1924) 「動詞の白他被使動の研究」須賀一好 早津恵美子編 『動詞の白他』ひつじ書房
- 山梨正明 (1997) 『認知文法論』ひつじ書房
- 吉村公宏 (2008) 『はじめての認知言語学』研究社

例文出典

日本語関係

- 『感傷』日漢対照 小林多喜二 上海訳文出版社 (1980)、『芥川龍之介全集1』筑摩書房 (1986)、
『芥川龍之介全集2』筑摩書房 (1985)、『芥川龍之介全集4』筑摩書房 (1987)、『現代日本文学大系43 芥川龍之介集』筑摩書房 (1968)、『羅生門・鼻・芋粥』芥川龍之介 角川書店 (1985)

中国語関係

- 『感傷』日漢対照 小林多喜二 楊幸雄 楊国華訳 上海訳文出版社 (1980)
『芥川龍之介小説選』芥川龍之介 文潔若訳 人民文学出版社 (1981)

(上海海洋大学准教授)